校長室だより～燦燦～ №６４８

パターンＣ

2022.11.2

今年度の野田中学校では、先生方それぞれが１人２回の研究授業を行うことになっている。研究授業になると、授業者は授業の設計図である学習指導案を作成し、教室には参観者がいることになる。授業後には、授業を振り返りながら協議を行ったり、個別にアドバイスを行ったりする。

今年度は、２回の研究授業のやり方を３パターン示した。まず、パターンＡである。従来通りに２回実施するというオーソドックスな方法である。学習指導案は、２回分作成する。次に、パターンＢである。同じ単元の中で２回実施する方法である。そうすると、２回目の学習指導案のおおよそ半分は１回目と変わらなくなる。

そして、お勧めはパターンＣである。同じ授業をクラスを替えて２回行う。学習指導案はというと、１回目の授業の反省からの変更点のみを修正するようになる。この方法を行うには条件が必要となる。学年２クラス以上で、授業進度に差がないといけない。本校のように学年４クラスになると、どうしてもクラス間の授業進度に違いが出てくる。それを逆手に取るのである。

１人の教員が、同じ学年の複数クラスを担当していることは多い。例えば１組で授業をする。同じ内容の授業を２組でも行う。もし１組でうまくいかなかったとして、２組でもそのままやるだろうか。何かしらの改善を加えるのではなかろうか。そもそも学級の成員である生徒は、学級ごとに違うわけだから、１組でうまくいったからといって２組でもうまくいくとは限らない。

パターンＣでは、この、何かしらの改善を２回目の学習指導案に反映させようというわけである。学習指導案に明記することによって、より意図的・計画的な授業となる。参観者にも改善点が伝わる。今まで行っていたことを形にしたとも言える。

６月から何人もの先生方が研究授業を行ったが、そのほとんどが、お勧めのパターンＣである。〇〇先生は、１回目の授業を行い、参観者からいただいたアドバイスが非常に役立ったと言っていた。そのアドバイスを生かして２回目の授業を行った。明らかによくなっていた。〇〇先生も、そのことを実感していた。

Ｈ先生も、１回目の授業を行った。授業後に協議会を開き、先輩の先生方からたくさんのアドバイスをもらった。それらを２回目の学習指導案に反映させた。２回目の授業は、扱う内容は同じなのだが、１回目の授業とは違ったものとなった。

授業後にＨ先生と話した。「Ｈさん、１回目の授業に点数をつけるとしたら何点？」「〇〇点です」「２回目の今日の授業は何点？」「ん～、〇〇点ですかね」４０点もアップしていた。Ｈ先生に伝えた。「いろいろな人に聞いてみると、自分の授業の自己採点は、だいたい２０点は低く言っていると思う。だから、今日の授業は実際には〇〇点だね。すばらしい」「ありがとうございます」「先輩のアドバイスを受け入れて、それを実際に授業でできるというのは、授業力がないとできないことだよ。成長したね」

先生方にも成功体験が必要である。一番うれしいのは授業をほめられることではないか。ところが、授業がうまくいくことなどまずない。反省点ばかりである。通常の研究授業は１回勝負である。ところが、パターンＣだと２回勝負できる。１回目と２回目の違いを評価することができる。授業者とともに２回目の授業のいいところを分かち合うことができる。

どの先生にもできることではないが、１回目と２回目の授業を両方参観できると、非常に勉強になる。参観者の勉強にもなる。教科を問わず、授業を改善するポイントのようなものが見えてくる。もしかしたら、一番勉強になっているのは、私なのかもしれない。パターンＣを選択してくれた先生方に感謝である。